

● 教科・領域 ●

自然・人・社会とつながり、 主体的に未来を創る児童の育成

「学びのゴール」を明確にした、対話的で深い学びの実践

京都府 木津川市立城山台小学校（校長 山本雅哉）＊前任：安倉晃一

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を「城山台小式授業スタンダード」として確立し、探究的な学習を各教科に取り入れた。
- ② 授業改善の第1の視点は、「思考スキル」に対応した「思考ツール」の活用
- ③ 授業改善の第2の視点は、「学びのゴール」の明確化

はじめに

本校は、京都府の最南端に位置する木津川市の新興地に、平成26年4月に開校した新設校である。

学校は、里山に囲まれた自然豊かな高台に立ち、校区は、旧村を含む鹿背山地域と新たに開発された城山台地域に二分される。平城京ゆかりの奈良市と隣接し、国宝や重要文化財等の歴史あふれる本市にあつ

て、城山台地域は、若い世代を中心とした新しい街といえる。今なお、戸建住宅や集合住宅、商業施設、主要な道路などの建設が日々進んでいる。

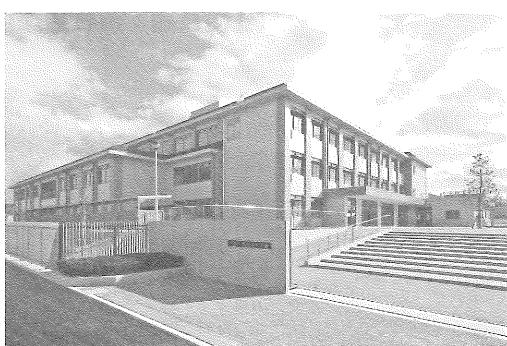
開校当時69名だった児童数は、地域の開発に伴って急増し、現在448名を数える。今後も毎年100名規模で増え続け、近い将来、児童数1000名を超える大規模校になると試算されている。

I 研究の経過

1. 「みのりのまち」での環境教育

城山台地域は、環境にやさしい「農の街（みのりのまち）」をコンセプトとして、開校前年に街開きをした。

また、鹿背山地域には自然豊かな里山が残り、オオタカやカスミサンショウウオ等が今も生息している。



◆ 城山台小学校の外観

さらに、農業の専門学科をもつ京都府立木津高等学校や京都大学研究農場が近隣にあり、各施設や機関と連携した多様な取組を展開することが可能であった。

このような恵まれた環境のもと、エコスクール・パイロットモデル事業認定校として開校した本校は、その特色を生かし、「環境教育」を柱とした研究に取り組んだ。

2. 京都府指定の2年間の研究

平成27・28年度に「京都府学力向上システム開発校」として研究指定を受け、「環境教育」を切り口に、自然・人・社会とのつながりを深めることで、他者と協働的に問題を解決していくために必要な資質・能力の育成を目指した。

具体的には、「生活科・総合的な学習の時間における話し合い活動」を軸に、思考が深まる探究的な学習の充実から学力の向上を図ってきた。

3. 環境に関わる学習「みのりタイム」

生活科・総合的な学習の時間を中心とした環境に関わる学習を「みのりタイム」と称して、地域や関係諸機関と連携しながら自然体験や社会体験を充実させ、他者との協働学習や対話を通して思考力・判断力・表現力等の育成に努めてきた。

「みのりタイム」の名称は、本校の児童に定着し、「環境」に対する意識と実践力を高める取組は今も大切に受け継がれている。

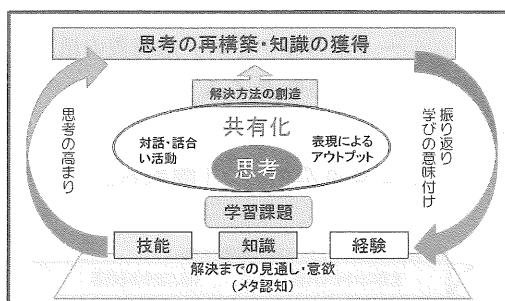
4. 本校が目指す「主体的・対話的で深い学び」の姿

「生活科・総合的な学習の時間における話し合い活動」を軸に、思考が深まる探究的な学習に取り組む本校においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現から以下の「児童の学びの姿」を目指してきた。

- ① 学習課題を、知識や経験と結びつけて思考し、論理的に問題解決を進めてい

る。

- ② 対話や議論により、思考を共有化し、互いの考えを生かしながら、再構築している。
- ③ 学習を振り返り、学んだことを自分なりに意味づけている。



◆ 目指す主体的・対話的で深い学び

5. 城山台小式授業スタンダード

目指す「児童の学びの姿」を実現すべく、本校における「主体的・対話的で深い学び」の在り方を模索し、作り上げたのが、「城山台小式授業スタンダード」であり、「みのりタイム」を中心に、思考が深まる探究的な学習を展開してきた。

このシステムをもとに授業を展開することで、子どもたちが一生懸命に思考し、考えを友達と練り会う姿や、学んだことを全校児童や家族、地域に伝える姿などに一定の成果が見られた。

Ⅱ 今年度の研究

1. 研究目的

今年度は、「みのりタイム」の取組を継続しながら、「城山台小式授業スタンダード」を「他教科」にも生かし、探究的な学習活動を生活科・総合的な学習の時間以外の教科でも取り入れることである。

さらに、「学びのゴール」を明確にすることを意識し、積み上げた児童の力をさらに向上させたいと考えた。

2. 具体的な取組

(1) 探究的な学習の「他教科」への展開

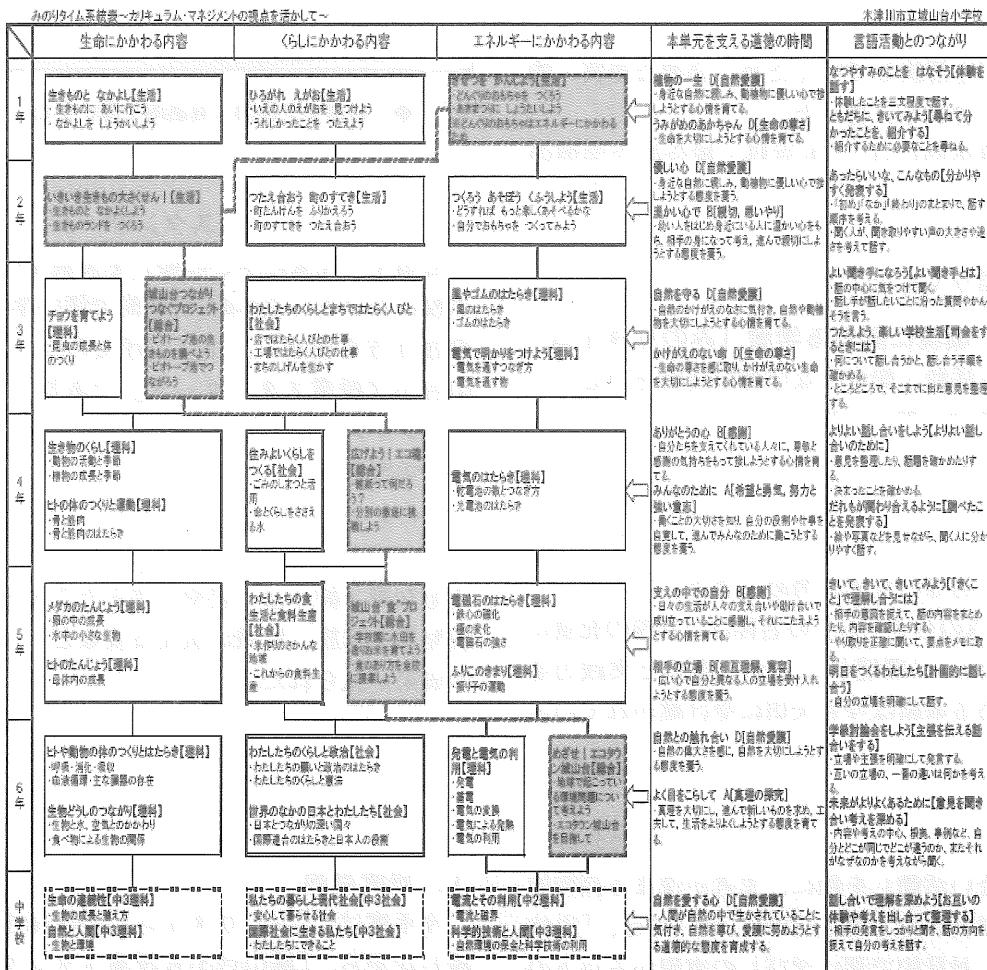
～「みのりタイム」系統表の活用～

2年間、「みのりタイム」の学習の中で培った児童の環境に対する意識の高さをさらに向上させるために、「他教科」への展

開は、「みのりタイム」との関わりが深い教科・単元から始めてみようと考えた。

その際に、本校の環境教育の柱である「カリキュラム・マネジメントの視点を活かした『みのりタイム』系統表」を活用した。

この系統表を「学びの地図」として、教科間の横断や他教科とのつながり、義務教育9年間の系統性から中学校の教科への発展等を意識して授業を構成し、「みのりタイム」と「他教科」とをつなぐ授業研究を全学年で実施した。



[カリキュラム・マネジメントの視点を活かした「みのりタイム」系統表]

(2) 研究日程

- 4月：理論研修「本校が目指す学力観」
研究主任による研究授業
- 5月：理論研修「新学習指導要領の要点」
- 6月：研究授業（4年・3年）
- 7月：各学級の実践交流・思考スキルカリキュラムの作成・テーマ研修報告
- 8月：理論研修「各教科の見方・考え方」
- 9月：テーマ研修報告
- 10月：研究授業（5年）
- 11月：研究授業（2年・1年）
- 12月：テーマ研修報告
- 1月：自主研究発表会指導案作成
- 2月：自主研究発表会
1・2・3・6年公開授業
研究発表・研究協議
講演：関西大学 教授 黒上晴夫先生
先進校視察
- 3月：研究のまとめと来年度に向けて

(3) 授業研究の学年・単元

- 【1年】音楽科「いろいろなおとをたのしもう」
国語科「どうぶつの赤ちゃん」
- 【2年】国語科「おもちゃの作り方」
国語科「おにごっこ」
- 【3年】理 科「植物の育ちとつくり」
社会科「今にのこる昔とくらしのうつりかわり」
- 【4年】社会科「ごみのしまつと活用」
- 【5年】社会科「これから食料生産」
- 【6年】理 科「自然とともに生きる」

(4) 理論研修「各教科の見方・考え方」

各教科で探究的な学習活動を計画する上で大切にすべき視点となる「各教科の見方・考え方」について、理論研修を行った。

ご指導を仰ぐ関西大学の黒上晴夫先生に新学習指導要領解説にある「見方・考え方」の文章を構造化していただき、各教科における具体的な「児童の学びの姿」をイメージした。

どのような授業場面で、どのような思考が求められているのかを、児童の具体的な姿に当てはめて考えることを通して、教科の本質を踏まえた「深まりのある授業づくり」を目指すことができた。

(5) 「学びのゴール」の明確化

「学びのゴール」を2つの側面から捉えその明確化を授業づくりのポイントとして授業研究を行った。

<指導者の立場から>

指導者として、その学習活動を通して児童にどのような力を付けたいのか、また、その力は他教科でどのように生きていくのかについて見通しを持つことを大切にしている。

<児童の立場から>

児童自身が、見通しを持って学習に臨めるように、導入の場面で「学びのゴール」を意識することや振り返りで自分自身の学びの姿をメタ認知することを大切にしている。

(6) 教師にとっての「学びのゴール」

4月当初に、学校として目指す児童の姿について全教職員で話し合い、共通理解を図った。

児童の将来の姿を「学びのゴール」として教職員間で共有することは、目の前にいる児童に身に付けるべき力を意識することができ、ベクトルを揃えて研究に取り組む上で非常に大切な機会となった。

(7) 探求的な学習活動の展開例

～城山台小式授業スタンダード～
3年生：理科「植物の育ちとつくり」

導入「つかむ」

「つかむ」の過程では、本時の「学びのゴール」を確かめる。学び方の見通しをもつこの場面では、「主体的な学び」を意識している。

○ 「めあて」の提示

前時までの学習の簡単な振り返りの後、めあてを提示
めあて「植物の体のつくりの秘密を探ろう」

○ 「学びのゴール」を提示

本時では、「他の植物と比較して共通点と差異点を見つけ、どの植物にも共通している部分が、植物の体のつくりだと言える

こと」を目指す。

ゴール：植物の体は、～が同じです。

～はちがいます。【たとえば・・・】

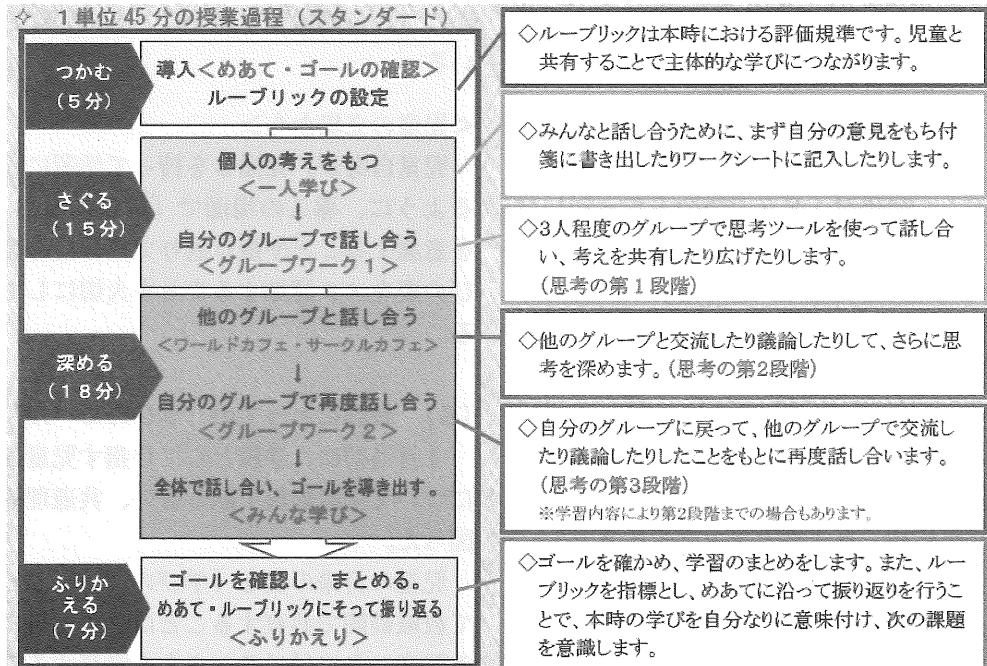
○ ゴールまでの「学習の流れ」を確認

そのゴールにたどり着くための学習の流れを確認する。「学びのゴール」を確認しているため、学習活動一つ一つに意味をもたせ、見通しをもって学習に向かうことができる。

○ ループリックの設定

さらに、主体的に学習に向かうための手立てとして、ループリックを設定している。

ループリックとは、授業の初めに児童と教師が共有する、本時における評価規準で、児童自身に、「学びのゴール」地点での自分の姿をイメージさせることができる。



[城山台小式授業スタンダード]

○ ループリック「A評価」の設定

児童とともに、さらに高い目標であるループリックの「A評価」を設定する。

A評価は、「植物の体のつくりの同じ所と違うところをただ説明するだけでなく、『たとえば』という言葉を使って具体的に説明できることにしよう」と決まり、児童と共有して学習活動の質の向上を目指した。

ループリックA：植物の体のつくりの同じところと・違うところを「たとえば…」を使って具体的に説明している。

展開「さぐる」

○ 「一人学び」から「グループワーク1」

まず、課題に対して、一人で試行錯誤させ、自分なりの考えをもたせることで、「ほかの友達は、どのように考えたのかな?」「交流したいな」という気持ちが生まれ、その後の学習活動に対して意欲的に参加することができる。

また、1時間の授業を通じた考え方の変容や深まりを見取ることができる。

○ 「思考の第1段階」における対話的な学び

このように、課題に対して自分の考えをもち、グループで練り合う段階を「思考の第1段階」と捉えている。

タブレットを活用して資料や動画・画像から得られた情報を読み取ったり、分析したりしながら、友達と意見交換するこの段階において、対話的な学びを意識している。

展開「深める」

各グループで交流し、ある程度の思考の整理が終わると、「深める」の過程となる。

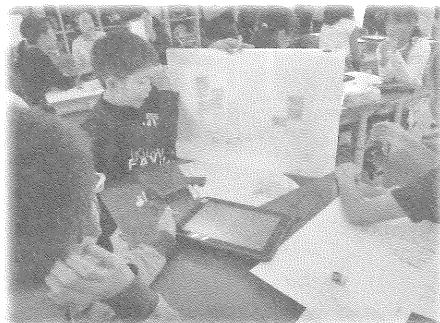
○ 「思考の第2段階」における対話的な学び

～サークルカフェ・ワールドカフェ等～「さぐる」の段階で、「グループワーク1」により導き出された考えを、他のグループと交流する。さらに他者の考えに触れるこの場面では、新しい気付きや考えの深化が期待でき、この段階を「思考の第2段階」と捉えている。

交流のスタイルについては、ねらいや発達の段階に応じて工夫し、サークルカフェやワールドカフェ等の様々な意見交流のスタイルを実践している。



◆ 思考の第2段階「サークルカフェ」



◆ 思考の第2段階「ワールドカフェ」

○ 「思考の第3段階」における対話的な学び

本校では、交流で終わらず、発達の段階に応じて自グループに戻り、他グループで

得られた情報や新たな視点等をもとにもう一度考えを見つめ直す時間を設けている。

この段階を「思考の第3段階」と捉えており、新たな気付きや自分たちにない視点等に出合い、考えが深まるグループも多い。たとえ意見が変わらなくても、考えた理由・根拠が深まる利点もある。

○ ゴールへ導く「みんな学び」

さらに、「みんな学び」では、指導者がファシリテーターとなり、各グループの考え方をつないだり、ゆさぶる発問をしたりして、ゴールへと導き、「学びのゴール」の共有化を図っている。

このゴールは、全員で導き出した最適解であるため、それを受け、もう一度個人の考えを言語化するという「学びの深まりを確かめる」ことにも挑戦している。

このように、他者との交流で新しい気付を得たり、それを自分たちの意見とつなげて考えたりすることで、さらに考えを深化させていくこの場面では、「深い学び」を意識している。



◆ 「みんな学び」の様子

まとめ「振り返り」

○ 視点を与える「振り返り」

最後の「振り返る」の過程では、自由に感想を書かせるのではなく、視点をしっかりと与え、本時の学びを意味付ける時間となるよう心がけている。

○ ループリックをもとにしたメタ認知

導入の「つかむ」の過程で設定したループリックをもとに振り返らせることで、本時の学習を終えた自分を客観的に評価する「メタ認知」の視点を大切にしている。

その際に、振り返りの「書き出し」等を工夫することで、学習したことなどをどのように価値付けられるかが変わる。

本時の「学びの自覚化」は、次時への「目的意識」にもつながると考えている。

○ 「思考スキル」に対応した「思考ツール」の活用

本校では、話合い活動において、主に「思考ツール」を活用し、思考の整理や情報の分析に取り組んでいる。関西大学の黒上先生に基本から教えていただき、授業をより探究的なものへと改善するためのキーポイントとなっている。

○ 思考スキル習得・活用の系統表

どの思考ツールをどのような思考場面において活用するかを整理・精選するために、関西大学初等部の資料を参考に、「思考スキル」を6つに絞った系統表を作成している。

6つの「思考スキル」と16種類の「思考ツール」に絞ることで、学年の発達の段階に応じて、系統立てた指導を行い、スキルを効果的に高めていくことを目指している。

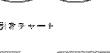
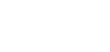
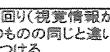
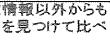
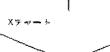
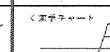
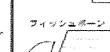
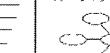
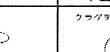
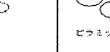
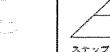
年度当初に、「思考ツール」を使うにあたっての「使い方やきまり」を共通理解す

る校内研修を行い、教員一人一人が、普段の授業の中で日常的に「思考ツール」を活

用することができている。

<6つの思考スキルの習得・活用の学年別到達目標>

木津川市立城山台小学校

| スキル | 比較する | 整理・分類する | 多面的に見る | 関連付ける | 構造化する(理由付ける) | 評価する |
|------|--|--|--|--|---|--|
| ツール |  ベン図  つなぎチャート  Yチャート  Xチャート  マトリクス  KJ法 |  Yチャート  Xチャート  マトリクス  KJ法 |  くまチャート  フィッシュボーン  バフライチャート |  イメージマップ  コンセプトマップ  ピラミッドチャート |  クラウドチャート  ピラミッドチャート  ステップチャート |  PDA  座標軸 |
| 1・2年 | 身の回り(視覚情報から)のものの同じ上違いを見つける。 | 身の回り(視覚情報から)のものの分け方が複数あることに気付く。 | 身の回り(視覚情報から)のものの分け方が複数あることに気付く。 | 言葉と言葉のつながりを見つける。 | 伝えたいことと理由を見つける。 | めあてに対して、学習を振り返る。 |
| 3年 | 視覚情報以外からも視点を見つけて比べる。 | 視覚情報以外からも視点を見つけて分類する。 | 視覚情報以外からも視点を見つけて多面的に見る。 | 言葉と言葉のつながりに意味付けをする。 | 情報を集めて、伝えたいことを組み立てる。 | 学習を振り返り、よかつたことと改善点を整理する。 |
| 4年 | 多様な視点で比べる。 (詳しく比べるために多くの視点をもつ) | 目的をもって分類する。 | 目的をもって多面的に見る。 | 言葉と言葉のつながりに意味付けをする。 | 調べたこと分かったことをもとに、主張を組み立てる。 | 判断した結果を理由と合わせて述べる。 |
| 5・6年 | それぞれの思考スキルの性質を理解し、適切な思考スキルを選択し、課題解決をする。 | | | | | |

※ 関大初等部式思考力育成ガイドブック 思考スキル書得の方リキュラムを参考にして作成

[6つの思考スキルの習得・活用の学年別到達目標]

- モジュール学習での「思考スキルアップ」
さらに、本年度から、新たに15分間の

モジュール学習「しろやまタイム」を教育課程に位置付け、思考スキルアップや読書

| 回 | 月 | 思考スキル | 思考ツール | 課題（テーマ） |
|----|---|---------|---------|----------------------------------|
| 1 | 4 | | | |
| 2 | | | | |
| 3 | 5 | 整理・分類する | Yチャート | 学校のとっておきの秘密を整理しよう。(全体) |
| 4 | | 整理・分類する | Yチャート | 学校のとっておきの秘密を整理しよう。(全体交流) |
| 5 | | 比較する | ベン図 | 教室と図書室を比べよう。(全体) |
| 6 | 6 | 比較する | ベン図 | 犬と猫を比べよう。(全体) |
| 7 | | 整理・分類する | KJ法 | 好きな動物の仲間分けをしよう。(全体) |
| 8 | | 整理・分類する | KJ法 | 好きな食べ物の仲間分けをしよう。(個別) |
| 9 | | 整理・分類する | KJ法 | 好きな食べ物の仲間分けをしよう。(グループ交流) |
| 10 | | 多面的に見る | くま手チャート | 朝顔の葉をいろいろな方向から見てみよう。(全体) |
| 11 | 7 | 多面的に見る | くま手チャート | 朝顔の花をいろいろな方向から見てみよう。(個別) |
| 12 | | 多面的に見る | くま手チャート | 朝顔の花をいろいろな方向から見てみよう。 (グループ交流) |

[1年生：思考スキルアップタイム年間計画] (一部抜粋)

活動・言語活動等の学習に計画的に取り組んでいる。

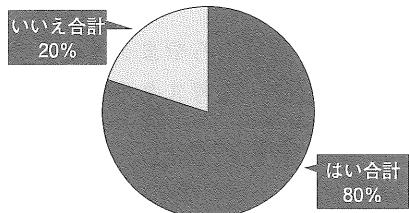
そのなかでも、毎週金曜日は全校「思考スキルアップ」の時間としている。「思考ツール」を使って考えたり、友達と話し合ったりする、よい練習の場となっている。

学習に直接関わるテーマだけでなく、学年の発達の段階に応じて様々なテーマを与えることで、児童が楽しく思考し、系統立てたスキルの向上を目指している。

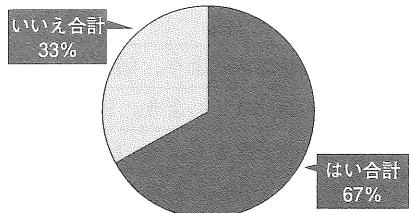
ときには、この15分間を「一人学び」の時間とし、5時間目の授業にスムーズに入る等の活用をすることもある。

この取組と年間計画については、試行の段階といえ、改善の余地がある。年度末に見直しを行い、改善を図る予定である。

友達と話し合って、自分の考えを深めたり、広めたりするのは楽しい。



授業の終わりに、学習したことについて振り返り、自分のがんばりや成長を見つけている。



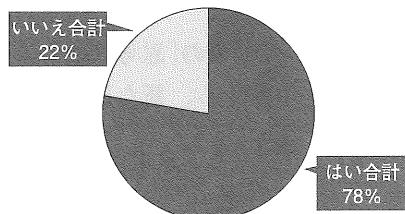
III 研究の成果と課題

本校独自で今年度1月に実施した学校アンケートの結果から、「友達と話し合って考えを深めたり広げたりする楽しさ」や「教科で学んだことが他の教科でも活かせる」という、学びのつながりを感じている児童が8割に上ることがわかった。

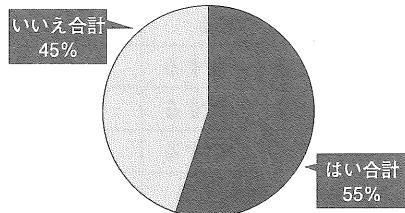
本校が目指す「対話によって自身の考えが深まる」ことや、既習事項をつなげて、知識をネットワーク化・構造化するという「深い学び」を子どもたちが実感している様子がうかがえたことは一番の成果である。

しかし、その一方で、課題も見えてきた。昨年度までは「みのりタイム」において「自

学んだことを他の学習で生かしたり深めたりしている。



自分の考え方や意見を発表することは得意である。



[学校アンケートの結果 (平成30年1月実施)]

分の考えを発表することができる」と答えた児童が増加傾向にあったが、本年度、「全教科において」と質問の範囲を広げたために、肯定的な回答が全校児童の約半数にとどまってしまった。比較的自由度が高い「みのりタイム」とは異なり、「教科では正解が存在する」「間違っていたらどうしよう」という不安が児童の胸中に広がっている様子がうかがえる。

また、自身の学びを客観的に振り返る「メタ認知」の視点を大切にした振り返りについても、まだまだ浸透していないことがわかる。地道な取組が今後も求められる。

《成 果》

- ・ 「学びのゴール」を示し、ループリックを共有することによって、児童は見通しをもち、自ら目標を立てて主体的に学習に向かう素地が育まれてきている。
- ・ 試行錯誤しながら授業研究を繰り返す中で、これまでみのりタイムで展開してきた探究的な学習を、「その他の教科でも生かすことができる」という手応えを感じることができた。
- ・ アンケートの結果からもわかるように、学校全体で、「主体的・対話的で深い学び」を意識した思考力を育てる授業づくりを行うことで、児童の意識の変容が見られた。

《課 題》

- ・ 「城山台小式授業スタンダード」の各教科における活用の可能性を感じる一方、教科では、押さえなければならない指導

内容があることや、各教科の特性からこだわり過ぎると、逆に思考の流れが滞ることがあった。

- ・ 単元構想の中で「習得・活用・探究」をどのように設定し、技能を習得することと、探究的に学習のどちらに重きを置く場面かを見極めることが必要である。
今後は、基礎的な力も確実に身に付けさせ、自信を持って考え方を伝えることができる児童の姿を目指したい。
- ・ 振り返りの時間が不足することがあったため、「自身の学びを振り返る大切な時間」という意識を強く持って、学習活動を精選する必要がある。
- ・ 「何を持って、学びの深まりとするのか」「新しい評価の観点をどのように捉えるか」等の定義を共通理解し、学校として評価の在り方を見直していきたい。

おわりに

児童数の増加に伴い教員も増加し、学校体制が大きく変容する過渡期といえる。

本校の研究を丁寧に継続・発展していくことが重要であり、そのためにも、児童が主体的・対話的に学びを深めている姿を励みに、教員も探究的によりよい授業づくりを目指していきたい。

(教頭：竹花裕子)